

# へびと楳図神学 ―楳図かずお『へび少女』の源流と支流

高橋 明彦

A Snake and Umezu Kazuo's Theology: A Source or a Branch of "Hebi Shojō (The Snake Girl)"

TAKAHASHI Akihiko

## 1. はじめに

およそ三〇〇タイトルの数える楳図かずお作品において、へびが主要モチーフとして描かれた作品としては、次の9作品をあげうるのだが、一九六〇年代に子ども時代を過ごした人にとって楳図かずおと言えば『へび少女』が代表作であると見えるように、へびは最も特徴的な楳図マンガの恐怖モチーフと思われるが、たった9作品というリストを見るかぎり案外少ないというのが率直な感想になるのだろうか。

- ① 「口が耳までさける時」(『虹』29号、一九六一年)
- ② 『へびおばさん』(『花』佐藤プロ、1〜7号、一九六四〜五年)
- ③ 『ママがこわい』(『少女フレンド』32〜36号、一九六五年)
- ④ 『まだらの少女』(『少女フレンド』37〜45号、一九六五年)
- ⑤ 『へび少女』(『少女フレンド』11〜25号、一九七五〜六年)
- ⑥ 『うろこの顔』(『少女フレンド』9〜23号、一九六八年)
- ⑦ 『蛇娘と白髪魔』(『ティーンルック』27〜29号、一九六八年)
- ⑧ 『蛇』(『少年サンデー』34号、一九七五年)
- ⑨ 『約束』(『少年サンデー』40号、一九七六年)

もちろんさらにこの中へ、謎の美少女おろちは名前だけのへびだが、『おろち』を入れることも出来る。あるいは『14歳』に登場する

恐竜型ロケット・チラノザウルス号や子どもたちが十四歳になると変身してしまうという恐竜も、関連づけられるかもしれない。恐竜は残酷さの象徴であり、爬虫類としてへびの一種だからである。

そもそも楳図のへびもの(へび作品)とは、その基本が「わたしのおかさんはへび女であり、あるいはへび女に入れ替わられており、ふだんは優しいが、ほんとうはわたしを食べようとねらっている」という類型を持つのだが、それはまさに『洗礼』に結実する母子関係であり<sup>1)</sup>、しかし『洗礼』にへびモチーフが描かれない以上、へびが出ないへびものも楳図作品にはあるということになる。つまりへびはへび以外のものにまで変容可能なのだ。楳図が描いた他の動物的モチーフすなわちねこやクモやキツネにはそういう特徴はないから、やはりへびは特権的ではないだろうか。そして、へびを源流として様々な変奏を生み出し、逆に様々な要素が一つのへびに流入していくさまが、楳図作品に見られるのではないだろうか。そして、それは一続きの作品様態として内在的連続的に捉えることができるのであり、私はこれを楳図神学と呼ぶのである。

## 2. 具体例1 貸本時代の作品

しかし、話を一気に広げず、まずこれらの作品を順に見ていこう

と思う。楳図のへびものの嘴矢は①「口が耳までさける時」である。初出は貸本向け少女雑誌『虹』で、三五頁の短編読み切り、初めて「恐怖マンガ」と銘打たれた作品である。貧家の少女さくらが養女として貰われていった先の養母がへび女であり、冬眠する前に毎年養女にした少女を食べている、この少女はそこからようやく逃げ出すことが出来た、という話だが、その養母は、「さくらさん、今日から私があなたのお母さん。だからあなたは私のもの」と言い、その成長を楽しみにしている。さくらには十分にふとるように食事をさせるが、みずからは普段食事をとらず、しかしかげで捕まえてきたカエルを丸呑みにして食べている。この家に仕える婆やは事情をさくらに語って聞かせる。「わ、わたしは、もうがまんができんのじゃ。さくらさま、この女は恐ろしい蛇ですぞ!」「私は何もかも知っています。私はこの女が生まれる前からこのお屋敷にご奉公しております。何の因果かこの女は、からだ中ウロコだらけの蛇のような姿で生まれてきました。それどころか、このごろではだんだん本当に蛇のようになってきたのじゃ。」「そして毎年、女の子をもらうと、たべていましたのじゃ。寒さが近くなると、冬の眠りのための栄養分をたくわえるために。蛇は冬眠をするからのう。私は今まであわれと思ひ、つかえてきたが、もうがまんできん。」

そして包丁を手に養母へ斬りかかるが、婆やもまたへびに変化しておりカエルを丸呑みにするのである。「みなされ。私まで、この女といっしょにくらしていると、このごろでは蛇のようになってくる。私はそれが恐ろしゅうてならんのじゃ。」養母と婆やは死闘を繰り広げる。さくらは逃げ出すが、完全に蛇体と化した養母が追いかける。絶体絶命と思われたとき雪が降り始め、へびは寒さに弱く谷川の濁流に呑まれる。語り「流れにチラリと不気味なものの片りんが見えて消えて行きました。それはたしかに蛇でした」。この後、さくらはもとの実家に戻り本当のお母さんと祖母に再会する。

少女マンガらしい強引なハッピーエンド、とは必ずしも言えない。「それから約一年の間、私は高熱にうなされ、うつうつとして床にふせていたのです。けれど、私たち親子三人は、どんなに貧しくとも、今後決して離れないとちかいました。」回復された家族像は、相変わらず老婆・母・娘のトライアングルなのだ。

②『へびおばさん』の初出は貸本向け少女雑誌『花』（佐藤プロ、一九六四年五月／翌年五月まで刊行と推定）である。物語は山川さつきとかんなの姉妹が祖母から聞く、明治時代の奈良県の伝説から始まる。オツネの滝で大蛇に出会ったスケじいさんが、逃げ帰ったものの高熱を出して死んでしまった、という話である。場面は続いて、さつきとかんなが、友人の冬子と連れだってオツネの滝を見に行き、滝の池中から着物姿の美しい女が出て来るのを目撃する。

冬子が帰宅すると、父は「新しいお母さんだよ。お前のいつもほしがってた」。その紹介された女こそ、さきほどオツネの滝から現われた女であった。「あなたは、おつねの滝の中から出てきたのねっ」との非難に、父親は怒って冬子にびんたを食らわす。新しい母親は、父親が見ている前では冬子に優しいが、二人だけになると冬子をさいなむ。「冬子、よくおきき。わたしは蛇なんだよ」「そうなんだよ。私は本当はおつねの滝に住む主のうわばみなんだよ。人間に化けて、お前のお父さんの所へやって来たのさ。」「わたしはお前がにくい!」「そのきれいな顔…、初めてお前のお父さんに、写真を見せてもらった時から、お前を」「私はお前のお父さんを愛している。しかし、お前はゆるせない!お前は私の子どもでもなんでもない!私はお前がじゃまなのだ。」

冬子は、母親は蛇であり自分は丸呑みにされると父に訴えるが、父は信じない。「ばかばかしい。信じられるもんか。お前は どうも、はじめっから変だぞ。」「お前はお母さんにシットしているのだ。」「新しいお母さんを心のどこかで、けいべつしているのだ。本当のお母

さんでない」と云う気持がどこかでわたかまっているのだ。」

冬子は、同級生のさつきとその妹かんなに、新しい母が、三人で目撃したオツネの滝から現われた女であることを確認してもらおうと家に呼ぶ。しかし、母親はふだんどおり美しく優しく、さつきにもかんなんにも滝の女と同じ人物とは見えない。冬子は叫ぶ「あなた達、なんにも知らないからよ！お母さんはいつも化けの皮をかぶってすましているからよ！」

母親は三人それぞれに土鍋の鍋焼きうどんを振る舞う。さつきとかなんはおいしいと言つて食べるが、冬子はこわがつて蓋を取ろうともしない。さつきは非難する。「ねえ、冬子さん。いまの態度よくないと思うわ。あれじゃお母さんに悪いと思うわ。あなたこそ、蛇のような人！ねちねちしてて、本当の蛇のような人だわ！今まであなたを一番のお友達だと思つていた私はずかしい！」そう言つて妹つれて家を出て行く。

しかし、冬子の土鍋にはたしかに、うどんではなく蛇がいつびきまるのまま入っていたのだ。冬子はさつきを呼び止め、ふたりで再び土鍋の蓋を開くと、果たして中身はおいしそうなうどんである（目の錯覚ではなく母親がすり替えたのである）。さつきは完全に冬子を見放す。

冬子は学校を休み続ける。父の不在をねらつて、母が冬子をしつこくいじめめる。冬子はもう母をへび女だと完全に信じている。が実は「この美しい私へびなぞと、ばかめが。冬子が病的に蛇ぎらいなのを利用して…、蛇のまねをする事にしたのさ、蛇のまねをね。さいわいおつねの滝の伝説のおかげで、冬子の奴め、私を本当の蛇の化身だと」。しかし、母親の背中には蛇のウロコが生え始め、実際に蛇体に変化していく。冬子とさつきを襲うが、タバコのヤニ（へびは苦手としてこれを嫌う）で撃退される。さつきはしばらく高熱を出し一週間も寝込んでしまうが、ようやく平癒する。冬子は事態

を次のように述懐する。「さつきさん。わたしのお母さんは、今病院にいます。きつとお母さんは、はじめから気が変だったのかも知れませんが。蛇のまねをするなんて。そして、まねをしているうちに、本当に蛇になったのだとおもいます。そういうことってあるんだそうです。それとも、本当に、どこかに蛇の血がまざっていたのかも知れないわね。」

### 3. 具体例2 『少女フレンド』とへび少女三部連作

③『ママがかわいい』、④『まだらの少女』、⑤『へび少女』は週刊『少女フレンド』の連載作品である。『少女フレンド』は楳図が貸本マンガ界から大手出版社のマンガ雑誌に進出して全国的な成功を収めた最初の舞台である。楳図の恐怖マンガは少女読者を中心に爆発的な人気をえて、社会現象まで引き起こしたのである。

さて、このいわばへび三部作について見ていこう。まず、③『ママがかわいい』である。弓子は入院している母を見舞いに行き、母からこの病院にへび女がいるという話を聞き、院内を探索し偶々閉鎖病棟の格子越しにへび女を見る。その晩の弓子の回想「それにしても病院で見たふしぎな女の人、おかあさんによくにっていた」。その頃病院では病室を抜け出したへび女は弓子の母親を襲っていた。翌朝、退院の迎えに行くと病室は大騒ぎ。弓子のお母さんが記憶を無くしていたからである。さて、退院してきた母は手が冷たく、生肉や生卵を食べたがり、蒲団にはウロコが散らばっている。弓子はそれが母ではないことに気付く。「おかあさんはいつもカエルやネズミばかり食べたがるわ。それにふる場におちていたのはへびのうろこなの。まちがいないわ。おかあさんはへびなのよ」。父はそんな弓子にびんたを食らわす。しかし弓子はなおも「いやっ、いやっ。わたし、おかあさんがかわいい」とわめきまくる。われわれ読者は弓

子が正しいこと、つまり母親はへび女がすり替わったものであることを知っているから、弓子の訴えに納得できるのだが、実際、常識的な立場にたつ父親や祖母らには弓子のほうが異常に見えてしまう。この真偽や善悪の判断が逆転してしまった関係・世界を作り出すのが楳図ホラーの妙味である。とは言え、本作のこの設定が示すものは、そうした動的な視点の変化（真偽や善悪の判断の逆転）のストーリー的妙味に限られるのではなく、母を恐れる娘という『洗礼』などに結実していく楳図の描く母子ものの正統的な流れにこのへび女の話が在るということである。ならば、ではなぜ母と娘は対立するのだろうか、そしてなぜそれはへびを通してなのか。この問いに答えたものはまだかつていなかったはずである。

さて、ストーリーは、『へびおばさん』と同じように、母になりすましたへび女に少女は狙われるも、間一髪で助かり、へび女は再入院し、病院に記憶喪失状態で幽閉されていた本当のお母さんが正気を取り戻し、家に帰るといふハッピーエンドを迎える。祖母「弓子、ごめんよ。やっぱりおまえのいったとおり、あれはへび女だったんだね」、父「あのへび女は、専門の病院へうつされたそうさ。あの女は、じぶんがへびだと思いきや、なんでもへびだと信じると、ほんとにうろこのある病気のさ。なんでもへびだと信じて、ほんとにうろこがあらわれるんだそうさ。超常体質と云って」、弓子「恐ろしかったけど、もういいの。だって今度こそ、今度こそ、おかあさんがほんとうに帰ってきたのだから」。

ここから直接に連続する連載作品が、④『まだらの少女』である。病院に送られたへび女は、弓子を憎んでおり、脱院して弓子への復讐を狙っている。弓子は夏休みに親戚に呼ばれて長野県山奥美土路村で過ごす。へび女は弓子の大型トランクに潜り込み現地に赴く。美土路村での弓子はいとこの京子とともにへび屋敷に行き、そこでへび女に出くわす。じつはへび屋敷はへび女の生家であり、へ

び女は自らの寿命が尽きたことと今ここへ戻ったことの奇遇とを感じて、村人が屋敷に火を掛けたことを受け入れ、観念して死んで行く。これにて一件落着かと思いきや、京子はその体内にへびの血が入り込んでいてへび少女に変容していき、ついでその妹のマリ子、おばさん、おじさんもへび化していく。村人は、しかし、弓子こそ村に災厄を持ち込んだへび女だと決めつけ弓子を追い詰めるが、へびの嫌いなタバコのヤニを使って、へびに取り憑かれているのが京子であることを示し、また京子もその体内から血が流れ出てもとに戻す。

以上があらすじだが、へび女がトランクに潜り込んで旅行を果たすのは、後に『赤んぼ少女』でも使われるアイデアである。また、へび女がなぜ弓子に執着するのは、特に明示されていない。加えて、弓子の親戚のいる美土路村がへび女の生家があるという設定も、全くの偶然のようには見えないが、弓子の先祖の土地であるから、なにかしらの因果関係の設定は可能だったはずだが、特に設定されていない。そしてへび女はそこで死を迎えるのだが、この内省的な場面はいささか感動的である。「ついに最期がきた！わたしの運命を知って、きつと家が呼んだんだ。」そして「ついでくるのかい」「おまえは生きのびておくれ」と言っておへびを火の外に投げ渡す。『赤んぼ少女』に先だって、モンスターの側に感情移入される構図が既に導入されているのだ。その分、作品のポイントがぶれているように評する事も可能かもしれないが（恐怖テイストは薄まるから）、小へびを救う態度（それは娘をいとおしむ母の姿である）も含め、私には非常に興味深い視点だと思われる。

『まだらの少女』連載終了後、半年ほどにわたる『紅くも少女』の連載を経て、今度は⑤『へび少女』の連載が始まる。ここには『へびおばさん』にも見えた山川つきき・かなな（やまびこ姉妹と呼ばれらる）が再び登場する。姉妹は祖母から明治の頃の話として、しのば

ずの沼で中村利平さんがうわばみを鉄砲で撃って片目にしたが、そのためへびの祟りを受けて高熱を出して死亡した話を聞いているところから作品は始まる。中村利平とは、さつきの親友の中村洋子のおじいさんである。後日、洋子を訪ねて、片目に眼帯をした美しい女が来て、洋子はその女の養女となるべく、引き取られる。その女は、日中は優しいが夜になると自身をしのばずの沼のうわばみだと言って、夜な夜な洋子をさいなむ。また、女にはさらに隠して養っている母親がおり、母親はすでに自身を完全にへびだと思いつている。なお本作もへび女の内省的側面が描かれているのが特徴的である。

この内省はへび女のみならず、その母親にもあてはまる。養家の離れには地下に洞穴があり、洋子はそので老婆に出会う。へび女の母親である。洋子に対して言う、「ふふふふ、だまされてもらわれてきたね。おまえのおかあさんになったあの女は、うわばみのうまれかわりじゃ。」しかし同時に、洋子の手を取り言うのである。「ゴクン、うまそうじゃ。」「くくく、きょうからおまえもわたしのようになるのだよ。かわいいねえ、おいで」

へび女であるお母さんは、洞穴から逃げ出してきた洋子に次のように告白する。「洋子さん、とうとう見てしまったわね。」「何もかもいうわ。そのほら穴の中にいるのはわたしの母なのよ。今は冬みんなをしているの。」「母は完全にへびになっているのよ。」「わたしもそのうち、だんだんあなるのよ。わたしはまだ、昼のあいだはふつうなの。」「でもわたしは、こんなおそろしいことは、わたしの代でおしまいにしようとおもったの。」「だけど、わたしはどうしても子どもがほしかったの。それであなたをもらったの。」「でも今では、ほんとうにあなたがかわいいの。どうしても、どうしても、はなしたくない」

子どもへ注がれる愛情と母から受け継いだ宿命とが無理なく一致

させられるためには、別の個所で重大な解離分裂が起きているのである。『洗礼』で、顔に母と同じアザが出来はじめた上原さくらが、そのアザを谷川先生に見せて言うセリフ「これはわたしの母がわたしにゆずったものよ」「わけなんてないのよ。だれだって子どもは親に似るしかないのよ。ただそれだけよ」と相まって重い響きをもたらずだろう。

さて、この後へび女は、自らの血を洋子に飲ませて、洋子もへびにする。へびになった洋子はへび女の命令でさつきやかんなもへびにしようとするが、最後は洋子がへび女に逆らい、へび女は山津波を起こして消え、タバコのヤニの入ったおまもりをしっかりと胸に抱きしめていた洋子は助かる。「その後、洋子さんはサツキたちのかん病のかいあってよくなり、いまではすっかり元気になりました」

ただしこの結末は、一九八〇年代以降の再単行本化の際に描き変えられ、洋子は山津波に流されたまま見つからず、『ママがこわい！』が描く冒頭の病院に収容されているへび女となることで、三部作が連続話として完成するのである。

さつき「へび女も、それから、誰も助からなかったのかしら…。」  
「そんなことないわ。洋子さん…、きつとどこかに流れていて、助かっているわ。もとの洋子さんにもどって助かっているわ…、きつと！」しかし、シーンは病院に変わり、医師たちの会話である。「二十年来、川を流れてきて助けられた女がいるんだけど、過去の記憶をなくしていて、どこの誰だかわからないそうさ。そして、自分をへびだと思いつているんだそうさ。」

以上があらすじである。本作はやまびこ姉妹が出演することも含めて、『へびおばさん』のライト的な作品である。水辺から現われること、即ち『へびおばさん』ではオツネの滝、本作ではしのばずの沼であるが、その説話と片目のへびのモチーフの因果譚復讐譚となつている点で、ストーリーだけでなくモチーフにも共通してい

る。また、ラストの山津波も、民話や伝説でいうところの蛇(じや)抜けを踏まえてある。この点は『へびおばさん』には無い。ただし「口が耳までさける時」ではへび女は谷川に落ちていった点は、すこしこの蛇抜けに近いだろう。

#### 4. 具体例3 『少女フレンド』終末期とその後

『少女フレンド』で最後の連載となった⑥『うろこの顔』は、久々二年ぶりのへびものである。さてこれは、姉妹の相克を描いた作品であり、主人公は沼田陽子。彼女と仲良く育った姉・久留美は難病を患い、ウロコが生え始める等身体的な変化を伴って、妹に嫉妬心を抱いてさいなみ始める。結局は亡くなるのだが、その後、陽子もまたウロコが生えてきてへびに変容していく。こうした怪奇現象は実に姉妹の父親が若い頃にしかした過ちが原因だった。「わたしはまだ、若い頃だった。そうだ、婆やがまだうちにやって来る少し前の頃だった。わたしは奥秩父に仕事で出張した時のこと。」旅館の仲居はそれが入山禁止の山だと告げる、「村はへびが多いうえに、御神体として、見たこともない双頭のへびがまつられているということです。村人はもとは平家の落武者だそうです、世間との交際を断つうち血族結婚が重なり、かたわ者が生まれるようになったそうです(サンコミ版による)」。それでみんな恐れるのです。」が、若い父親は興味から山に入り、双頭のへびに出くわし石を投げてそれを傷つけたのである。この御神体社の巫女であった女が、この後すぐに沼田家へ婆やとして入り込み、こうして久留美、陽子、そして妻・奈津江に呪いを掛けていたのである。父もへびがはいった布袋を頭からかぶせられる。が、しかし袋を内側から食い破り、へびもはずたずたに噛み碎いて、蛇身に化した婆やと谷川に落ちる。「それから数日後、陽子の父は川下でいきたえだえの所を通りがかった所

をすくわれたそうです。だが、老婆のことは誰も見た者はありませんでした。」陽子の顔や身体はウロコは消える。陽子は述懐している。「考えれば、ばあやはあわれです。へび村の近くに、ばあやとへびのお墓をつくることに、おとうさまがきめました。平和であることが、どんなにありがたいか、今しみじみと、わかりました。」

結末をハッピーエンドで締めくくるのは少女マンガ雑誌作品の定型であるが、婆やへの憐憫などは、安易な結末と言いつけるべきではない倫理的な優しさの表現として読みとりたいと思う。同時に『雨月物語』「蛇性の姪」の豊雄のような、へびに魅入られる軟弱な男の結末部での変化と同じ精神的成長を、この父親の行動に見ることができるとも思えないという点を補足しておく。

⑦『蛇娘と白髪魔』は、初出誌で「原作＝楳図かずお、脚本＝長谷川公之」とクレジットされる。『うろこの顔』などのへびものと『赤んぼ少女』とをミックスして長谷川公之の脚本で大映が映画を企画し、十二月十四日の封切り公開を前に同題でコミカライズしたものであり、ゆえにこれは厳密な意味での楳図作品と言えない。⑧「蛇」は、新しい母を迎える少年の視点から描かれた短編作品であり、⑨「約束」は、『猫目小僧』の作品の一つだが、子どもが生まれた日に、かえるを丸呑みにしようとしているへびに、かえるを見逃してくれたら自分の息子をあげると約束してしまう男の話で、民話の形式の内にある。今この三作は大きく取り上げることを見ないでおく。

#### 5. へびものへの旧来の評価

へびものについての旧来の評価は、概ね次のとおりであり、それらはまことに妥当なものである。まず副田義也は、もともとへびやくもやねこを描いてきた楳図マンガに批判的であったが、そうした動物的恐怖モチーフを排して描かれた『おろち』(一九六九〜七

〇年に連載)により評価を一変させ、楳図作品を称賛するようになった。特に『おろち』に関して「憎悪する子ども」というテーマを見出したのは秀逸である<sup>2</sup>。『うろこの顔』の単行本あとがき解説として一九七〇年に書かれた次のエッセイにもそのテーマが見られる。ただし、副田にとって、へびを介しての憎悪は子ども同士の争いのメタファーだが、へび自体はグロテスクな変身のガジェットにすぎないのだろう。

現在の楳図氏の力量からいえば、「うろこの顔」は、率直にいつて、作品の完成度の点では申分がないものとはいえません。しかし、それだけに、この作品では、かれがくりかえしとりあげてきた、いわば譜代のテーマの一部が原型であらわれています。それらは憎悪と変身です。他者の憎悪、自己の変身が生じさせる恐怖感が、幼い読者たちを、読みたいけど読みたくない、見たいけど見たくないという、執着と嫌悪の融合した常態へと連れ込みます。(中略)

また、変身は、さいしょは久留美の変身ですが、ついで陽子の変身です。それは、人間の体が蛇のそれにかわるもので、それにともなって、正気が失われ、さらに、変身から回復するため健康な他者の血が必要とされることから、その他者への殺意が生じます。その変身の描写は実に緻密です。それが趣味にあわない私などは閉口しながら、このような描写をする楳図氏の感覚、神経に一種のおそれを感じます。ともあれ、その変身は、ひとが、自己の肉体と精神を喪失することだと抽象化されましよう。

強力な他者に憎まれながら、自らの身を守る方法もちあわせない弱い存在。存在の自己の肉体と精神を失い、なにかわらない他のものになってゆく存在。幼い読者たちは、それらの

キャラクターに魅きつけられます。それは、それらの存在が、かれら自身の一面の肖像であるからにほかなりません。かれらの日々の生活は手ごわい競争相手によってみだされており、かれらの急速な成長の過程は自己の喪失を強制される過程でもあります。楳図氏は、それらについての子どもたちの心理をよく洞察しています。<sup>3</sup>

細川涼一は次のように記している。へびものについて、民話伝承的な因果応報譚よりも、心理恐怖を描くことを好むという。

恐怖マンガとして見た場合、へび女の恐怖が洋子からさつきに伝染することで、後発の『へび少女』の方が恐怖の要素が高められてはいるが、一方で『へび少女』は前近代的な因果応報譚に先祖返りしてしまった観も否めない。母(継母)と娘の関係をめぐる心理的な恐怖の物語として読んだ場合、原型の『山びこ姉妹』(『へびおばさん』)の方が、より説得的であるといえよう。<sup>4</sup>

想田四はへびものは少女マンガの継子いじめを踏襲し、それをグロテスクに表現したものだとする。良い意味で常識的な評である。

この時点では劇画やラブロマンスなどは、中高生以上の読者層を想定した貸本向けものであり、雑誌に移行するにはいくぶん対象年齢を下げる必要があった。変化は絵柄のみにとどまらず、思春期の少女同士の対立を軸にした複雑な構造を持った前作に比べて、「へびおばさん」は継子いじめといった少女マンガにおける通俗メロドラマのパターンを下敷きにしており、年少読者にも分かりやすい内容になっている。が、いじわるな継母をへび女というグロテスクな存在にまでもっていくことで、定番の少女メロドラマは一気に恐怖の物語へと化するのだ。<sup>5</sup>

へびものは、継子いじめのグロテスクな変奏であり、しかも伝説伝承よりは心理劇として描かれるべきであり、子ども社会の反映でもある、といった見解は十分に穏当で、取り立てて間違っていると言わなければならないが、私には魅力的な読解ではない。私はそうは考えない。つまり、楳図のへびものは、継子いじめを逆に包括する女の問題が根本にあり、近代心理劇をも超えた人類普遍とでもいふべきであり（実際には日本中世以来の固有の文化的なものであるが）、さらには子ども問題にも限らないものとして、これを位置づけることが可能である。では、それを実現するへびとは何か。

## 6. 古代—へびと多産性

古代日本の蛇信仰を総合的に研究したのは吉野裕子である。それまでの日本民俗学での水の神としてのへびの捉え方に対して、宇宙論的なへび像を提示した。「日本民俗学は蛇を水の神としてのみ扱っている。もちろん、蛇は水の神でもあるが、それにとどまらず、蛇の第一義は祖先神、宇宙神であって、私の『蛇』は、そのことを自信をもってはじめて扱っている」（九頁）。五、六世紀に渡来した陰陽五行説によって日本の文化は構造化・組織化されたが、なお蛇信仰はその地下水脈のごとく脈々と今日にまで至るとも言う。具体的に描き出される先史日本の蛇信仰は、蛇の形態や生態に生命力と強さを見いだすものであった。「要するに、縄文時代人の蛇への反応は、第一に、その形態に対して、第二に、その毒の強さ、生命力の旺盛さに対してであって、それらは相乗効果をもって、蛇を祖先神にまで崇めていったのである。」（五六頁）。あるいは、「要するに、弥生の頃の蛇信仰には縄文人のそれを引き継ぎ、それと混合したもの、彼ら独自のもの、鼠の天敵として田の神に移行する蛇信仰等があり、それら各種の蛇信仰が混在し、複雑な様相を示して展開してゆくこ

ととなる。」（五七頁）。すなわち多産豊饒の農業の守護神でもあった。

これが文字化された例を見よう。『常陸国風土記』である。

茨城の里に兄と妹がいた。妹の努賀比咩は夜来て朝帰る名も知らぬ男を相手として懐妊し小さなへびを生む。生まれた子は昼は話をせず、夜には母と話をする。母（妹）と伯父（兄）はこれを神の子だと思っている。杯に入れておくと、一夜のうちにいっぱいになる。醜（ひらか）に代えるもすぐに成長していっぱいになる。器がたりなくなり、母は子に、ここでは育てられないとして父のいる山へ帰れと言う。子は、命令には従うが一人で行くのを憐れんで従者を付けてくれと頼む。母はお前も知るようには私と兄しかおらず、従者は付けられない、と言う。子は恨みに思っただけのまま、去り際に伯父を殺す。母は驚いて、子に器を投げ当てたので、子に天に昇ることは出来ず、この峰に留まった、云々。

異類婚姻譚であるが、生まれたへびは異形の存在というよりは最初から神として尊ばれている印象がある。また、すぐに器にいっぱいになるほど急速に成長するというのも、たとえばかぐや姫の成長などと比較しても、神の子として自然の属性かとも思われる。そして、日中と夜間とで状態が異なること、家を出なければならぬ運命にあること、その際に伯父（父的な存在であろう）を殺すことなど、ここに一人の女をめぐる二人の男が争う（万葉集で言えば真間の手児奈伝説である）、そして子が父を殺すというオイディプスの関係が見出だされる。

意外なことに吉野はこの話を異類婚姻譚とは見ず、現実存在した蛇巫（へびを神として崇める巫女）が御神体たる蛇との模範的交流を行い、野生の蛇を捕獲しては飼っていたものを神の子として敬い、それが増えすぎて毒の牙によって人が死んだ話であるとしている。たしかに、現実にもあり得た話であろう。



吉野の理解では、この蛇巫はさらに展開する。へびが壺や瓶などの器に入れて飼育されていた話として『今昔物語集』巻十九第二十一、第二十二の連続話が紹介される。「日本古代の蛇巫が土器の中

に蛇を飼い、これを祀った痕跡はるか後代までよく記憶され、この蛇巫に関する蛇・壺・餌の関連の記憶は、『今昔物語』第十九にみられるような説話の母胎ともなっている。」(二三二頁)。「この二篇

の仏教説話は、先にも述べたように、蛇が現実には蛇巫によって壺とか折櫃のようなものの中で飼われ、給餌されていた、そうした日常生活に諸人の目に触れていた土俗蛇信仰の現実という背景があつて、はじめて生まれたもので、唐突に説教の種となつたのではない。

蛇と壺、または折櫃のイメージは、人の脳裏にそれを受け入れる素地があつたから、その説教も現実性をもって人の心に訴えるところがあり、記し留められて後世に残されたのである。」(二三六頁)

さて、この壺中のへびというモチーフが、そうした土俗蛇信仰の常態であることを踏まえて初めて理解できることがある。椋図には一九七五年に発表された作詩作曲の楽曲『へび少女』があるが、その歌詞「だれも心にへびを一匹飼っていて、そいつが目を覚ます。」の意味、背景がこれで分かるのである。この場合の「へび」は「人など好きになつたから、おまえ今日から大人だよ。」「何も知らずにういればよかつたから、おまえ今日から大人だよ。」「お前今日から大人だよ。」などの他の歌詞から、文脈的に比喻だと推測していたが、現実には(あるいは女は)蛇を飼ってきたのである。さらに言えば、『へびおばさん』に見られた土鍋の中にへびがいると恐怖する冬子の感性は伝統的正統的なものであると言えるだろうし、『へび少女』でへび女が、すでに先にへびに化した自分の母を洞穴に住まわせているのも、壺中のへびの外在化された状態だろう。あらゆるへび少女がそうであるように、母への憧れと嫌悪というアンビバレンスは、自らも不可

避的に母のようになっていくという変身への恐怖・不安・嫌悪の表現なのである。

## 7. 中世—情念と嫉妬のバリエーション

古代的なへび(男女ともに共通する祖先神、多産豊饒の信仰)に對して、仏教思想における女人救済(逆にいえば女人差別)とも相俟って、へびの様態を女のあり方として限定していくのが中世である。この点で最も優れた洞察を総合的に示したのが高田衛である<sup>7)</sup>。

中世を代表するへびモチーフは謡曲に完成を見る「道成寺」であり、近世を代表する上田秋成『雨月物語』の一篇「蛇性の姪」もまた、そして高田が示す近代の泉鏡花「南地心中」や、現代の中上健次『蛇淫』もまた、「道成寺」の沃野に広がるバリエーションである。しかもこうした下流にはさらなるバリエーションがある。本稿は、それら高田がまとめ上げた成果に与りつつ、椋図かすがおが描くへびが、そうした連続の中にあることを確認したいと思う。

高田は中世以降のへび伝説の展開において淫女渡水、蛇道心、蛇髮譚、両婦地獄といった女のへび伝説の経路・類型を描き出すのに先だつて、まず、現実に存在した奇妙なへびを示す。このあたりの高田の論法は絶妙で、へび伝説の研究の嚆矢として、近代の民俗学などのはるか以前の成果として山東京伝『骨董集』や曲亭馬琴『兎園小説』といった江戸の考証随筆をあげ、そこに「両頭蛇」「双頭蛇」を見出だしている。

たとえば文政七年(一八二四)十一月二十四日、本所豎川通り一の橋で川浚えをしていた人足の卯之助の川楸に三尺ほどの蛇がかかった。それが普通の蛇ではなかった。その蛇は長い胴体の前にも後にも頭があつた。すなわち『世説新語』や『烈女伝』

等で知られ、その姿を見るものはかならず死ぬと伝えられた両頭蛇であった。それで騒ぎになった。

ただし生き馬の目を抜くと江戸の人々は、それを見たらほんとに死ぬなどと誰も信じてなんかいなかった。むしろわれもわれもと見にきた。発見者の卯之助はどうしたかというところ、さすがに薄気味わるかったので町名主や町役人を呼んで検分を乞うたのだそうだ。名主らはこれを見とどけたけれど、さて処置に困ってその蛇を町奉行筒井伊賀守に差し出したという。筒井伊賀守もさぞ迷惑したことであろう。

こういう記事が、この両頭蛇の精密な写生図を添えて、馬琴の『兎園小説』に載っている(第二集)。蛇を写生したのは、当日本所堅川町に往診に出かけて、名主とともにこの蛇を実見した数原清庵という町医者で、とくに前後に頭を保つ両頭蛇の蛇腹に興味を持ち、その鱗のつなぎ目をたんねんに写している。

また『兎園小説』は、別にある農家の生垣で見つかった双頭蛇の記録も載せている(第六集)。双頭蛇というのは一本の胴体が首のところでもまたになり、ふたつの頭を持つ蛇のことでヤマノオロチの子分のような蛇である。こちらの方はまだ生まれたばかりで黒く小さく、噂をきいた見世物師が買いにきたので、桶に入れて飼っているうちに、ある日、猫がきて食べてしまったと書かれてあった。<sup>8</sup>

高田は、この両頭蛇や双頭蛇は実態的にはたんなる奇形に過ぎないが、文化伝統的には女の妄執の媒介として位置づけられることを明らかにしていくのである。

まず、淫女渡水の伝承とは、これを六段階に分析しうる道成寺説話の純然たるバリエーションである。

①堀麦水『三州奇談』巻二「淫女渡水」は加賀国鶴来町のこと、冬場の白峯川(手取川)で鮭の密猟を企んだ強力な男が投げた網に掛

かったのが、「女の白きひとへを着たるが、髪は乱れて藻くづの如く流れながら、彼の網を力に這ひ上る」というものであった。魔物かと思うがさにあらず、鶴来の某家の下女で毎晩川向かいの里の馴染みの男の所へ通っていたのだという。人に見られることを避けて渡し船にも乗らず、暗闇を幸いと渡し船の渡し綱に捕まって渡河していたが、今宵の綱は露に濡れて手が滑り河に落ちてここまで流されてしまった、という。

②その話を聞いた別の者の見聞譚。江州草津の宿の留め女(客引き)が、大津の馴染みの男へ毎晩通って来る。六里の道を毎晩通うのかと尋ねると、女は実は矢橋の渡し(琵琶湖の渡しで諺「急がば回れ」の語源である近道)を泳いで渡るといふ。しかも鬢鏡を額に結び付け向かいの高観音の常夜灯を水面に映すので明るく、その光に従って泳げば簡単に渡れるのだと語る。男は話を疑わしく思い、かつ女のことを恐ろしくも感じ、次の日高観音に行き僧侶に相談して、その晩だけ琵琶湖に向けた常夜灯を板で遮ってもらう。はたしてその夜女は来ず、またその後音沙汰も絶えた。しばらくして草津の知り合いに状況を尋ねると、女は行方不明だといふ。大津の男はいまや隠しがたく、事情を話し、水練の達者な者などを使って捜索したところ三日目に瀬田の橋に女の遺骸が見つかった。灯りを失い溺死したのであらうと、男は憐れみ恐れて出家したと言ふ。なお、女の遺骸を引き上げたところ、脇の下にウロコのようなものが三枚あったのを人が見つけたという。堀麦水はこの話を「人妖にや」と結ぶ。さて、高田はこの話が実は琵琶湖近辺に伝わる悲恋物の類話にすぎないことを示した上で、本話のみの特徴として「ウロコのような物三枚」つまり女がへびであったことの暗示を重視する。へびと関連づけられない渡河①とは異なる本話の特徴である。

③『奇異雑談集』巻二の一「戸津坂本にて女人僧を逐て共に瀬田の橋に身をなげ大蛇になりし事」。この章題から明白なように、僧

侶を慕う齡三十余の女が逃げる僧侶とともに瀬田の橋に飛び込み、水中で大蛇となつて僧にまわりついてたという話である。高田はさらに田原藤太伝説などにも示されるように、瀬田の橋の下には龍宮があつたとされたことなども付け加えている。

④『拾遺御伽婢子』巻一の三「蛇化人契」。近江国田上の住人佐田源内は、瀬田の唐橋で美しい女と出会い聞けば凋落した名家の姫だと言ふ。そのまま宴席に連なり晩には同衾したが、翌朝目覚めると岩窟で一人であつた。疲れ果てて自宅へ戻るも、病臥し翌朝には肉も溶け白骨だけがこつた。一族が洞窟を調べると中には大蛇のわだかまつた痕があつた。これは『雨月物語』「蛇性の姪」の類話である。なお高田はさらに⑤⑥としてあと二話、僧侶を追つた女が蛇体に変ずる話を示している。以上これらは皆、女の淫乱性が妖変する系脈であり、一対一の男女が描かれていたものであつた。

さて、次に蛇道心(くちなわどうしん)の説話である。片仮名本『因果物語』上・五「妬み深き女死して男を取り殺す事、付り女死して蛇となり男を巻く事」。駿河の男が信濃に行き帰つてきた後で、信濃でも妻帯したのであるう、女が恐ろしい形相をして来た。駿河の女房はそれを男に告げる。男は信濃の女を騙して三保の松原に連れて行き船遊びと称して海に誘ひ沈めて殺す。信濃の妻は蛇に変じて男の腰に巻き付き、何度切つても離れない。男は打つ手を無くして高野山に登り仏門に入った。即ち、蛇道心説話には男一人に対して二人の女がいることが特徴である。そして、蛇体に変じた女は男に巻き付く。仏教説話として女人の嫉妬を戒めたものであろうが、このバリエーションにさらに蛇髪譚がある。それは刈萱道心や一遍上人の発心由来譚である。筑前国の加藤左衛門尉繁氏は、仲の良い妻と妾との昼寝姿に互いの髪が蛇と化して争ひ合っているのを見て世の無常を感じ、刈萱道心として高野山で出家する。さて、さらにこの女の嫉妬を具体化したのが、両婦地獄(ふためじごく)で

ある。熊野比丘尼が諸国を廻つて説教をした地獄図の中に描かれる、女人が墮ちる地獄の一つである。「容易に類推できるように、「蛇髪譚」の二人の女の間には一人の男がいるわけで、かりに「蛇神譚」の女二人の中間にその男を書きくわえるならば、それはそのまま形態的には「両婦地獄」の構造になるのであつた。」(一〇九頁)

ちなみに熊野比丘尼の地獄図『熊野観心十界曼荼羅』に描かれた地獄には、八寒地獄、剣の地獄、衆合地獄、血の池地獄、不産女地獄、そして両婦地獄がある。

以上、中世以降のへび伝説が、女の嫉妬や情念の表現として媒介されている様を觀た。その本流たる道成寺説話は男女が一対一で対応するもので、寺の鐘や男の腰に蛇になった女が巻き付く。さらにそのバリエーションとしてあるのは両婦地獄に結実する男女が一対二で対応するものである。そこには、一人の男に二人の女が巻き付く。そして、ここには双頭蛇、両頭蛇といった実態的な奇形の蛇のイメージとの連関がある。

さて、伝統的なへび説話は男女の嫉妬を描いているのに対して、楳図の描いたへび女には男への嫉妬も恨みもなく、あくまで少女マンガの枠組み(たとえば継子いじめ、あるいは子ども同士の競争)と考えられてきた。そして、その関係は、伝統的伝説的であるよりは、近代的な心理劇としてあるほうが好ましいとされてきた。私が本稿で示そうとしたのは、へび女たちは母子や姉妹で争う二人の女たちの嫉妬であるということである。この時、間でへびに搦められる縮めつけられる男は父親である。美男美丈夫然としてすました顔をしているが、正しく判断できず、一方の女を殴りつける身勝手な父親なのである。また、二人の女は『おろち』の「姉妹」や「血」において姉妹バージョンとして、『洗礼』での母子として、もはやへび抜きで描き直されるのである。私はすべての楳図作品の根底にあるのがへびだと言いたいのだ。

## 8. おわりに——一つの身体の二つの表現

『雨月物語』に描かれた両極的な女性像、すなわち「浅茅が宿」の宮木（七年間不在の夫を幽霊となって待つ貞女）と「蛇性の姪」の真名子（淫乱妖艶な蛇の化身）との間にある種地続きの同質性を見る高田衛の見解は、いままも大方の秋成研究者が賛成するだろう。「しかし、宮木の愛執のすがたはまた、その「逆転」をみずからの内部にもつことにおいて、すさまじい可逆の契機を失っていないのである。愛と貞潔の物語の主人公は、いったん所をかえれば、すさまじい反逆者になるという本質を失ってはいない。「蛇性の淫」の真名子、「吉備津の釜」の磯良は、所をかえ、かたちをかえた宮木であろう。」（二五五頁）。

この二極の同体性は、秋成においては『雨月物語』以前の初期浮世草子作品にすでに見られるものだが（淫婦お春と貞女藤野）、この二人もまた偏執的な人物を描いた浮世草子氣質物が生んだ人物である。

私が楳図作品において、ひたむきな美女（たとえば『イアラ』の小菜女）や息子を助けようと懸命な母（『漂流教室』の高松美恵子）と、へび女たちの妄執や『洗礼』の上原松子（上原さくらの母）の狂気とに、なにか同じ偏執的な匂いをかぐのは、上述の秋成読解が培ってきた読み方に帰因するのかもしれないが、読解の問題ではなく、それは作家の特性が似ているからだと思う。それは生命（へびもひとも含む）に対する洞察だろう。

先に楳図作品に描かれた女性像の多様性について検討した際<sup>10</sup>、私は次のように記しておいた。本稿はその解答編である。

すなわち、楳図の女性像の多様性を生み出す、外見と内面の対比として展開される美醜、正邪、聖俗といった二元的対立は、一つの本質・実体から発現したものである。そもそも多様な無限の展開を

認めつつもその根源に一つの本質を置くあり方を哲学ではプラトニズムと呼んでいる。ただし、標準的なプラトニズムが結局のところ本質を優先して世界の多様性を仮象としてしか見ない立場であるのに対して、改良型のプラトニズムは多様性をこそ重視する。それは例えばプロティノスであり（流出説）、スピノザであり（神即自然の汎神論、あるいは一つの実体と無限の様態）、ベルクソンであり（エラン・ヴィタールによる生物多様性）、ドゥルーズである（問題としてのイデアと解としての生）。東洋思想でいえば朱子学である（理一分殊）。このとき、神的な本質と表現された多様性とは内在的な関係を有している。内在的とは、多様性が一つの本質からの合理的で地続きの表現であり、その展開・表現に飛躍が無いあり方である。そして、こうした超越性を持たない、内在的な本質の表現を楳図神学と呼ぶのである。

では問題は、その本質とは何か、である。

へびである。へびとは、楳図の作品世界において、外見と内面という静的な対立関係のみならず、母や娘という相対的・循環的な動的関係として発現する、変容せざるをえない生命の本質を言うものである。

## 註

- 1 拙著『楳図かずお論』（青弓社、二〇一五年）第4章を参照されたい。
- 2 副田義也「憎悪について」『現代マンガ論』日本経済新聞社、一九七五年
- 3 副田義也「憎悪と変身—楳図かずお『うるこの顔』、楳図かずお『うるこの顔』（サンコミックス、一九七〇年）所収。
- 4 細川涼一『楳図かずおと怪奇マンガ』白地社、二〇一二年、六七〜六八頁
- 5 想田四「解題」『へびおばさん』小学館クリエイティブ、二〇〇九年
- 6 吉野裕子『蛇 日本蛇信仰』講談社学術文庫、一九九九年刊。原著は一九七九年二月、法政大学出版局より刊行された。
- 7 高田衛『女と蛇 表徴の江戸文学誌』筑摩書房、一九九九年。なお、高田は自

- 8 身が参照した研究として、堤邦彦『近世仏教説話の研究』翰林書房、一九九六年、井上啓治『山東京伝の考証学と読本』新典社、一九九七年をあげている。高田衛前掲書、四八頁。なお高田はこうしたへびを含む様々なイメージ連関を、文化伝統などと明示的に捉えるのではなく（それは文献学的典拠論の悪弊に墮する危険性を持つ）、「見えない世界」や「原基的イメージ」と呼ぶ。
- 9 高田衛『定本上田秋成研究序説』国書刊行会、二〇一二年。原著は一九六八年、寧楽書房より刊行された。
- 10 高橋明彦「株図かすおが描く女性像―女の多様性と美醜・正邪・変容へびと株図神学」『株図かすお美少女コレクション』玄光社、二〇一九年刊

（たかはし・あきひこ 一般教育等・日本文学）

（二〇二〇年一月五日受理）

